2025年9月14日（聖霊降臨後第14主日・特定19、C年）
メッセージ
「一緒に喜んでください」
（ルカによる福音書15:1-10）

司祭ヨセフ太田信三

ルカによる福音書15章は、「失われた羊」「失われた銀貨」「失われた息子（放蕩息子）」という三つの「失われた」たとえによって、「失われた」ものを「見出した」喜びを伝えます。失われたものを見つけ、喜ぶのは他でもない、神です。迷い出た一匹の羊も、失われた銀貨も何の努力もしていません。ただ、主人が捜し出します。神との関係は、私たちが主体なのではなく神が主体だということです。「失われた」「見失う」「無くす」と訳されている単語は「アポリューミ」という同じギリシャ語で、「死ぬ」とか「滅びる」とも訳されます。すぐに神から離れて、「滅び」や「死」へと向かってしまう私たちを救いたいと心底望み、捜し出してくださるのが神である、ということです。

「羊が見つかった！」「銀貨が見つかった！」と大喜びしてくださる神は、その羊、その銀貨にこだわります。他の羊でも、他の銀貨でも駄目なのです。たとえば、自分の子どもが一人いなくなったとして、ならば養子をとれば良いじゃないか、とはなりません。それと同じように、神は私たち一人ひとりにこだわり、「あなたでなければ駄目なのだ」と、たった一人の命も失われることを望んでおられないのです。

失われていた命が帰ってきたことを喜ぶ神は、宴会を催し「一緒に喜んでください」と、共に喜ぶことを求めます。今日の福音書はファリサイ派や律法学者に向けて語られています。彼らは、自分たちは律法を守り、正しいという自負がありました。そして、それを守ることができない徴税人や罪人は救われないと考えていました。ファリサイ派や律法学者にとって、徴税人や罪人は「不要」で「いてはならない」人間だったのです。しかしそれは神の思いに反します。神はたった一人の命にこだわり、失われることを望まないからです。その神は、そのような悪い思いを離れ、共に喜ぶことを望んでおられるのです。

さて、今日の福音は私たちに、神の深い愛を伝えるとともに、あなたは共に喜んでくれるか？不要な、いてはならないとしている人間はいないか？一緒に食事ができない人間はいないか？と、問いかけます。私たちはこの問に痛みを感じるのではないでしょうか。しかし神は、そんな弱さを持った私たちのことをも、どこまでも捜し、愛し抜いてくださいます。他でもない、「私自身」が神に見つけられ、その愛を知ることで、私たち一人ひとりが共に喜ぶ者へと変えられるのです。